



チャケが死んだとき、あたしは泣けなかった。ママがしやくりあげているのを、茫然と見ていただけだった。

チャケは茶色の毛をした雑種中型犬。十七才と九か月で死んだ。あたしより五才年上だった。

ペット葬儀場から帰ってきて、あたしはママに言った。

「ママ、頭、痛い。寒い……」

「え？ 沙羅、大変。すぐ病院に行こう」

熱を計ると三十九度。病院で薬をもらって、そのまま寝こんだ。やっと頭が上がるようになったら、今度は耳が痛くなった。耳鼻科に行ったら中耳炎だと言われた。また熱が出た。それも治ってやれやれと思っていたら、目やにがでた。眼科に行ったら、はやり目だと言われた。目薬をさしながら部屋にこもった。すべてが完治したとき、あたし

は悟った。

これはチャケののろいだ。

チャケとは生まれたときからずっと一緒だった。けんかもよくした。お気に入りの手袋をぐちゃぐちゃにされて、大声でどなって、べしっと叩いたこともある。いつもチャケを怒っていた。のろわれて当然だ。きつとチャケはあたしのことなんて大嫌いだったに違いない。

近所の同級生、真菜の家に宿題をしに行った。

「こら、チョコ、クッキー、うるさい」

真菜の家には二匹のミニチュアダックスがいる。大騒ぎであたしの足元にまとわりつき、靴下をかじりはじめた。「大丈夫だよ、慣れてるから……」